

■基調講演

国立公園を考える～過去、現在、そして未来～

桂川裕樹（かつらがわ・ひろき）環境省自然環境局国立公園課長

ただいま、ご紹介をいただきました国立公園課長の桂川裕樹です。本日はよろしくお願いたします。本日は足摺宇和海国立公園の記念のシンポジウムに、これだけ多くの方が集まって盛大にお祝いされますことを、まずお慶び申し上げますとともに、また私どもとしましても、国立公園に関心をもっていただいている方がこれだけいらっしゃることに、本当に深く感謝申し上げたいと思います。地元あつての国立公園、地域とともに歩む国立公園と思っておりますので、皆様から高い関心をもっていただけますことは、私どもにとって大変嬉しい限りです。本日ここに参ります前に、足摺宇和海国立公園指定の歴史を読んでまいりましたが、先ほど広田先生からお話がありましたように、昭和 22 年に最初に国立公園の指定に向けた運動が始まって、昭和 30 年に国立公園に指定された後も、なお熱意をもって運動を継続されて、昭和 47 年について国立公園の指定に至るという、皆さんのこの地域への熱い気持ちを深く感じることができました。今日ここに参りまして、改めてその地域の熱い気持ちが、まだふつふつと残っていると感じたところです。私共もそれに応えるようなしっかりした仕事をしてまいりたいと考えております。

本日、国立公園指定 40 周年記念のシンポジウムということで、国立公園のことについて基本的なことを含めて、お話をさせていただきたいと思います。国立公園というのは、どんな仕組みであるのか、何が目的なのか、また将来どういう課題に向けてどういう対応をとればいいのか、あまり硬くならないように、私自身の経験と私の考えも交えて、お話をさせていただきたいと思います。

◆国立公園の歴史：「国立公園」という仕組みの誕生と広がり

国立公園は、当然ですが、日本だけではなく、世界のたいていの国にあります。世界に一体いくつ国立公園があるのかということですが、国連と国際自然連合が一緒になって管理をしているデータベースがあります。国立公園等の自然公園や鳥獣保護区等いろいろな自然保護の場所についてのデータベースであり、残念ながら正確でない情報もかなり入っていて、日本の情報も少し怪しいところもありますが、とにかく世界全体について共通の土俵で見られるデータベースです。これがインターネットで公開されていますので、少々調べてみますと、この世界に国立公園という名前のついているところは、全部で約 3,500 あります。アジアに 800、南北両アメリカに 800 くらい、ヨーロッパに 700、オーストラリアやニュージーランド、オセアニアといった太平洋エリアで 700、アフリカに 400、だいたい全部で 3,500 という数の国立公園があります。国の数でいいますと、目で眺めて調べたので少しいい加減ですが、だいたい 130 から 140 カ国に国立公園があると思えました。今、全世界に 190 ほどの国がありますので、7 割くらいの国は、国立公園をもっております。このアジアでも、香港やシンガポールといった小さな国でも国立公園はありますし、東ティモールのようにできたばかりの国にも国立公園はあります。そういうわけで、今この時点では、国があればたいていは国立公園というものもあります。しかし、その内容は色々あります。正直申し上げて発展途上国の中には、英語でペーパー・パーク、紙の上の公園という言い方をしますが、書類の上や地図の上では国立公園があるのですが、現地に行ってみると誰も知らない、何も無い、という公園もあります。ともかく自ら国立公園を名乗っているものは、全世界に 3,500 程、たくさんあります。

こうやって今、世界に当たり前のようにある国立公園が最初に生まれたのはアメリカです。1872 年、明治の初めの頃、アメリカのイエローストーン国立公園というのが、世界で初めてできた国立公園です。火山性の雄大な地形のあるところで、皆さんもきっとテレビ等でご覧になったことがあるだろうと思います。1870 年、アメリカというのは、当時まだ生まれてから 100 年も経ってない新しい国でした。国土は広い、自然は豊かで人は少ない、いくらでも自然を開発しても全然問題はないというふうにも思われ、アメリカ人もかなり乱暴なこと

をやったわけですが、さすがに 100 年もやっておりますと、こんなに自然を破壊していいのか、あるいは本当に貴重な自然というのは守っていかねばいけないのではないのか、あるいは、そういう貴重な自然を守ることができたならば、それは一部の人やどこかの会社が勝手に使うのではなくて、国民が国の宝として自由にそれに親しむようにすべきじゃないか、そういう声が、アメリカの中でだんだん沸き上がって、それで国立公園というものが世界で初めて生まれたわけです。ヨーロッパにもそれより前に自然を保護している地域はありましたが、たとえば、王侯貴族が自分の楽しみのために森林や湖を守っている、一般の人の立ち入りは規制されているような形でして、このように自然を守った上で広く国民に開くというのは、当時としては、新しい、また素晴らしい考え方でした。これは非常に他の国にも感銘を与えまして、19 世紀のうちにカナダやニュージーランドやオーストラリアといった国にも、同じように国立公園というものが生まれるようになったわけです。ところが、ヨーロッパにはなかなか広まりませんでした。何故かという、アメリカやニュージーランドの国立公園というのは、国立公園が全部国有地になっております。国が完全に管理をするというやり方をとっております。国立公園の中には、原則として人が住むことができません。農林業もできません。最初の段階では住んでいた人もいたのですが、追い出すようなことも一部では行われました。良い悪いは別にして、アメリカやカナダやニュージーランドといった歴史が浅くて国土が広くて人口が少ない国、そういう国ではそういうことができ、そういう国立公園をつくったわけです。専門的には営造物公園といいますが、国際会議の場とかでは、イエローストーン・モデルというようにいい方をすることが多いです。しかし、そういう国立公園は、これはヨーロッパではやっぱりつくれません。何故なら国土は狭いし、人はたくさんいるし、昔から人が住んでいますから、何百年も昔から住んでいる人たちを追い出して、新しく囲い込むことはできない。だからといって、何もしないでいいということはないわけです。ヨーロッパでも産業革命が起きた後には、自然破壊が進みましたし、都市の住民はなかなか自然に親しむ機会がない、やっぱりなにか手立てが要る。それは、アメリカよりずっとニーズは強かったわけです。そういうところで新しくヨーロッパで考え出されたのが、地域性の国立公園というものでした。これは国立公園ですが、国が全部国有地にするわけではない。国は規制をして開発、あるいは利用について一定の制限をかける。そして自然を守りながら人々に親しんでもらおうという、そういう形の国立公園でした。最初にヨーロッパでできたのはスウェーデンで、1900 年頃、日本では明治の終わり頃になります。これだったらなんとか自分の国でもできるんじゃないかということで、だんだんヨーロッパの各国でも国立公園というものが生まれるようになりました。日本の国立公園も、この流れをくんだようになっております。

念のために言っておきますが、アメリカのような全部国立公園を国有地にしてしまっ、完全に国が何から何までコントロールするのが一番良いとか、それが正しいとか、本当のやり方だということではありません。国際的にも、アメリカ型の国立公園と日本のような地域性の国立公園の中に優劣上下の別はないということになっています。それぞれの国が、それぞれの国が置かれた立場でどうやって自然を守って、またその自然を人々に親しんでもらうことができるのか知恵を絞って、その 2 つのタイプの国立公園が生まれたということになります。

日本では、ヨーロッパで初めて国立公園ができた頃、明治の終わり頃ですけれども、その頃に、日本でも国立公園をつくるべきではないかというお話が出てきました。なかなか紆余曲折もあったわけですが、そうした動きがだんだん形になり、国立公園法という法律が初めてできたのが昭和 6 年、1931 年のことです。今から約 80 年前です。その 3 年後に日本で最初の国立公園というのが、長い調査を経た上で決められました。阿寒、大雪山、日光、中部山岳、瀬戸内海、雲仙、阿蘇、霧島、この 8 つが昭和 9 年に制定された国立公園です。アメリカで最初の国立公園ができてから 60 年くらい、ヨーロッパで最初の国立公園ができてから 30 年くらい、若干遅れてはおりますが、世界史の中でみれば、日本の国立公園もそんなに遅くできているわけじゃない。ヨーロッパでもイギリスやドイツなどの国立公園は、第二次大戦後にできていますから、そういった点からいっても、結構早いほうにできたと思っています。最初 8 つで始まった国立公園ですが、最初のうちは厳選

主義ということで、あまり新しい国立公園を増やさないという、かなり厳しい選択をするような形をしておりました。また、今はもうありませんが、国立公園の数は最大でも20くらいだろうというようなことを考えていた時期もありました。そういうわけで、地域から声が上がっても国立公園に指定ができないところというのは、昭和24年に生まれた制度である国定公園に指定をするような形になってきたわけです。この足摺エリアもそのような道を歩んでまいりました。ちなみに現在は、全部で30の国立公園がありますが、一番最近になって生まれたのは、平成24年、霧島屋久国立公園を、霧島の錦江湾のエリアを大幅に拡大して、霧島錦江湾国立公園と屋久島国立公園の2つに分離しました。これが、最近の国立公園の指定です。

◆国立公園とは何か：国立公園の二つの目的

では、国立公園の目的は何だろうということですが、元になった国立公園の法律には、こう書いてあります。一つには、優れた自然の風景を保護すること、もう一つは、その利用の増進を図ることです。まず、優れた自然の風景というのは、天から与えられた国の宝、国民の宝ということですので、なるべくこれを損なわないで未来につなげていきたい、そのためにはしっかり守っていかなければいけない、それがまず大切なことです。でも、そういう自然だからといって、大切に守ってガラスケースに入れて、床の間に飾っておくようなことをしてもつまらないわけで、やはり皆さんにも親しんで、ふれあってもらいたい、ということがあります。だから大自然の風景を見ていただく、あるいは見るだけではなく、登山や海水浴やいろいろな形で、アウトドアでの活動を通じて親しんでいただく、そういうことによって国民の皆さんに心身ともに爽快になっていただくというのが、国立公園の重要な目的の一つです。ですから優れた自然というものを対象にして、保護と利用の両方を考えていく、これが国立公園という仕組みです。これは日本だけのことではありません。世界どこの国でも、自然保護だけを目的にするという国立公園はありません。絶対にないのかといわれると、そこまでは確認できませんが、普通は自然保護だけを考える場合は、日本でしたら、たとえば原生自然環境保全地域といったような、そのための仕組みがあります。他の国も同じです。国立公園と名がつくからには、保護と利用の両方がうまく回らなければいけない。少なくともそうならないと、良い国立公園とはいえない。昨年9月に韓国の済州島で、世界自然保護会議という大きな会議がありました。国際自然保護連合というのが4年に1回、総会をやり、これに併せて、全世界から1万人くらいの人が集まった会議が何日間か開かれました。私も出席をいたしました。その中で国立公園の関係者だけが集まって会議を一つやりました。全部で100数十人、40数カ国の国立公園の関係者が集まって話をしましたが、やはり話題の中心は、利用ということでした。どこの国でも保護というのは、いろいろ苦労したけれども、なんとかできた。でも、ちょっと最近、国立公園の利用がされていない、人々から忘れ去られているんじゃないか。いくら優れた自然があっても、人が来てくれなかったら、最後は、知らない、関係ないって話になってしまう。それはやはり絶対にまずい。どうやって、国民の方々、皆様に国立公園に親んでもらうのか、とくに若い方々をどうやって国立公園に連れてくることのできるのか、そういったことが話題の中心になり、やはり他の国も同じなのだと思ったわけです。もう一度申しますが、国立公園というのは、やはり保護と利用の両輪が、一番重要なところだと考えております。

◆外国の国立公園：国立公園の楽しみ方

ちょっと話を変えます。個人的な話ですが、私、海外で仕事をしていたことがございまして、タイの田舎で3年、ネパールの西部の山の中で2年半、JICA、国際協力機構という組織があり、そこに出向しまして、国際協力の一環として村おこしと自然の保全を、住民参加型で進めるようなプロジェクトをやっていました。元々山登りが好きでこういう仕事をしているものですから、できるだけ暇を見つけて、タイやネパールや近くの国立公園に遊びに行ったわけです。

タイの国立公園はアメリカ型を目指してつくられました。タイというのは歴史が浅い国ではなくて、今のタイという国になったのは今から900年くらい前、日本の鎌倉時代のことですから、人が住んでない広い土地が

それほどないのです。でもアメリカ型の国立公園をつくりたいということで、住んでいる人を追い出したり、村を潰したり、かなり強引なことをして国立公園をつくったわけです。国立公園の職員は大変恨まれており、夜道を歩いていると、知らない人から殴られるというようなことが、今から15年くらい前でしたが、私がタイにいたときも殴られたという話を聞いたこともあります。とにかくそういう形で国立公園をつくったのですが、逆にいうと、国有地にできるところしか国立公園にならなかったものですから、面積が大変小さい。また規制というのをしてないので、国立公園を一步出ますと、外はバンバン開発されており、国立公園の周りには、お金持ちの別荘やいろいろなリゾート施設が存在するというような状況になっておりました。こういったところも、アメリカ型国立公園の欠陥かなと思ったところです。タイの国立公園は、国が直轄でやっているのですが、何でも国がやるのは良いのですが、宿泊施設も非常にぼろい、サービスも悪い、国の方で雇っているガイドはいるのですが、態度は大きいし、非常に高飛車にものを言われるわけですね。宿泊施設の部屋も非常に汚くて、トイレとかシャワールームはネズミの糞だらけということで、ちょっと民間に任せた方がいいのではないかと、いうことを思ったわけです。

一方、ネパールの国立公園というのは逆の状況があり、ネパールで有名な国立公園ですと、チトワン国立公園というのがあります。インドとの国境の、ネパールでも平地のところにあるのですが、ここは本当によく管理がされておりました。それは何故かという、国はほとんど何もしておりません。ネパールというのは、大変に貧乏な国で、国の予算が大変小さいものですから、行政の力が本当に弱いんです。そこは国立公園の中に高級ホテルがありまして、ここの宿泊客にならないと、国立公園の一番いいところは見ることができません。2番手、3番手のホテルもありますが、そういうところは2番手、3番手の景色しか見られない。どこのホテルにも泊まらなければ、どこも見られない。そういう民間会社が、いってみれば外国人から高いお金を巻き上げて、国立公園の管理をしている、そのような感じのところでした。私と妻と2人でそこに行きまして、3泊4日で、10年ほど前ですが10万円ほど払って泊まりました。少々高いとは思いましたが、象に乗ってのトレッキングなど、おもしろい経験ができる場所でした。象に乗って行きますと、浅い川でも平気で渡れますし、草原の中に入っても背が高いので見通しが利く。何頭かの象でチームを組んで行くので、虎が出てきても大丈夫ということもいわれました。そういう形でおもしろい経験もできるものですから、10万円払ってもまあいいやと思うし、払うお金も日本人にはあるわけです。でもネパール人の給与はどれくらいかといいますと、当時40代の公務員とか会社員で、だいたい月給で5,000円から6,000円くらいでした。店員とか工場の労働者の人とかは3,000円もいかないくらい。そういうときに、3泊4日で10万円の請求をするホテルなわけです。つまりネパール人は相手にしていない。そういうのもちょっとどうなのかな、と思いました。

また、マレーシアでは、非常にジャングルの素晴らしいランピル・ヒル国立公園とか、あるいは、無人島や砂浜、珊瑚礁がきれいなトゥンク・アブドゥル・ラーマン国立公園に行きまして、これも大変おもしろかったのですが、マレーシアくらいになりますと、東南アジアの中でもかなりお金持ちです。正直申し上げて、おそらくシンガポールの次に生活が豊かです。そうすると、マレーシア人もお金を払って観光に来ていますので、これは結構良いわけですね。日本にも割合近い。国がやたらとのさばっているということもないですし、お金持ちだけ相手にしているわけでもない。安上がりで遊ぶこともできるし、お金を払っていいサービスを受けることもできる。なかなかいい仕組みになっているな、ということも思いました。

そんな形で、海外で遊んできたわけですが、これは一つ、アドバイスですが、皆さんが、もし海外の国立公園に行って遊ぶときは、是非ガイドを雇われるといいと思います。そのガイドも、グループツアーのような形でもいいですが、少しお金がかかっても、自分の妻とか自分の家族とか、友達グループで専用のガイドを雇うと、ほんとに面白く楽しく安全に遊ぶことができます。ネパールでの経験ですが、公園のような保全地域の中に、非常に良い展望スポットがありまして、ダウラギリという8,000mを超える山を見る場所がございました。8,000mを超える山というのは、全世界でも14しかないのですが、その一つ、8,000mをだいぶ超えるダウラギリを眺める、標高差にしたい6,000mくらいをいっぺんに見られる、すごい景色のところがありま

す。そういうところに行くと、感心します、こりゃすごいと思いますが、「わー、すごい」と言って15分もいたら飽きちゃいます。良い景色っていうのは、世界中どこでも説明はいりません。ダウラギリもそうですし、この足摺岬もそうだと思います。見れば必ず感心して、「わー」、と言いますが、それはそんなに長い時間じゃないですね。ところがいいガイドがいますと、いろいろな説明をしてくれるわけです。ダウラギリの説明もしてくれますが、その麓の村で、たとえば畑で何を作っているのか、放牧はどうやっているのか、独特な家の形はどういう理由なのか。ご飯を食べるためにそこら辺の食堂に入っても、これはどういう食材をどういう具合に加工したもので、ああだ、こうだといろいろ教えてくれるわけです。そういうのを聞かなかつたら、ただの村にしか見えない。でも説明を聞くと、ただの家に見えていたものが、なるほどということになる。ご飯を食べて、おいしいとかまずいとかいうことだけではなくて、地域の農業のことなどいろいろなことも含めてご飯を食べることができ、大変おもしろい。やはり良い景色というのは、「わー」と言って、15分くらいで終わっちゃいますが、そういう話を聞いて村の中を回れば、ダウラギリの麓の村の中で半日くらいぶらぶらしても、全然退屈しない。ですので、日本人が海外に行くとき、知らないところですから、良いガイドを十分に使っていただいたら、よいと思います。

また、これは日本の国立公園をどう活かしていくかにも、同じように重要なことで、今の日本も人口は減っている状態ですから、これから後、観光客がどんどん増えてくるというのは、なかなか考えにくい。そうするとやはり来ていただいた方にできるだけ長い時間滞在していただいて、できるだけお金を使っていただいて、できるだけ満足して帰っていただく。そのためには、やはりいろいろな情報提供をしていながら、楽しんでいただくような工夫をしていくことが、必要ではないかなと思います。

海外の国立公園で遊んできた中で、少し思うところがございます。日本人が海外に行きますと、皆さん、「地球の歩き方」というガイドブックを持って行きます。海外に行かれた方はだいたい買われたと思いますが、あれを持っているだけで、日本人であることが分かります。アメリカやイギリスの人はだいたい「ロンリープラネット」というガイドブックを持って行きます。この「ロンリープラネット」を海外でずいぶん見たものですから、日本に戻ってきてから去年の「ロンリープラネット」を見てみました。最初にパッと開くとカラーページで日本に行ったらここには行け、というのが14カ所挙がっています。当然、京都とか奈良とかが挙がっていますが、意外に日本の国立公園が紹介されている。その14カ所の中で出ていたのが、大雪山、中部山岳、富士箱根伊豆、吉野熊野、屋久島が出ていました。さらに中を見てみますと、国立公園という章立てがちゃんと出ていて、国立公園の名前や概要が紹介されていて、観光地として行くべきだとされているのが、全部で11ほどありました。全体で日本の国立公園の半分くらいは紹介されているということで、ちょっと意外に思いました。足摺岬は紹介されておりましたけれども、残念ながら、足摺宇和海国立公園としては、紹介されておりました。

◆日本の国立公園：現在の取組やこれまでの歩み

先ほど、昭和9年に日本で初めて国立公園をつくったと申し上げましたが、そのときには外国人観光客を呼び込むというのも重要な役割でした。国立公園というのは一つのナショナルブランドですから、当時は、世界自然遺産と同じくらい値打ちもあったわけです。今は、世界自然遺産もあるので、少し値打ちも下がってしまったかなとも思いましたが、まだまだ意外にブランドとしての値打ちは、少なくとも海外ではそうだったし、日本に来る外国人も、日本の国立公園というものについては、ブランドとしての価値を認めているということも申し上げておきたいと思います。

日本の国立公園というのは、全部で30あります。日本というのは南北に細長い国ですので、狭い国ではありますが、非常に気候も地形も生物も多様性に富んでいますから、30の国立公園があっても、それぞれ違う国立公園があるわけです。なかなかよく管理もされているし、評判もよい。ただ我々としても、これで十分だとは考えていなくて、もう少しやはり国立公園を増やすべきところがあるのではないのかと、今の時点ではそう思

っております。足摺宇和海の国立公園指定のためにご努力された皆さんからすると、ちょっと腹立たしいところがあるかもしれませんが、平成19年から、日本の自然の中でちゃんと保護されていないところがまだあるのではないかと、少し調べたりしまして、全国18カ所で、国立公園または国定公園の指定、あるいは拡張ということを考えております。そのなかで、たとえば東北に、陸中海岸国立公園というのがあり、先の東日本大震災で大変な被害を受けたエリアです。東日本大震災からの復興に少しでも貢献できればということで、地元の声も聞きながら、今、三陸復興国立公園ということで、新しいタイプの国立公園の立ち上げをしようと努力をしております。地元の方々との話し合いも済みまして、たぶん問題なければ、今年の前半には青森県の方まで広げまして、三陸復興国立公園という新しい国立公園が広がっていくことができるだろうと思っています。このように、国立公園の地域というのもだんだんに広がっていますし、また昔は結構マナーの問題とがありました。ゴミの持ち帰り運動とか、マイカー規制とか、いろいろな取り組みもだんだん功を奏してきました。国立公園の管理のあり方というの、結構いい形にできてきたと思っています。またそれを支える私どもの地方環境事務所や、自然保護官事務所、こういう組織の数や人の数もだんだん増えてはきました。

◆利用という課題：国立公園の利用者は減少し知名度は低下

しかしながら、今私が思うには、日本の国立公園にはまだ大きな課題がある。それは何かというと、利用ということだと思います。最初に申し上げた通り、国立公園というのは保護と利用の両方が大切です。保護ということについては、結構うまくできていると思っています。いろいろな規制があつて、皆さん煩わしいと思われるところがあるかもしれませんが、そのおかげで美しい自然が残っているというのも事実です。私が外国人と話をすると、欧米人だけじゃなくて、東南アジア人も、あるいはインド人、中国人、そういう人と話をしても、この狭い国にこれだけのたくさん人が住んでいる、しかもこれだけ発展した先進国でありながら、よくこれだけ自然が残っていますねと、皆さん感心していただけます。それは誇りに思つて良い。でも、それが保護されているだけで見に来てもらえないというのでは、ちょっとどうかと思うのですよ。やはり、国の宝、地域の誇りというのが国立公園ですから、皆さんにもっと楽しんでもらいたい。せつかく苦勞して、あるいは不自由な思いもして守っている自然を楽しんでもらいたい。先ほど人口も減っているからと申し上げましたが、国立公園の利用者が最も多かったのは、平成3年でして、その頃、全国の国立公園でだいたい4億2000万人くらいの方が1年間に来ていただきました。最近だと、3億4000万くらいに減っています。この足摺宇和海のデータを見ても、平成3年頃が270万人、今が180万人というような数字になっています。大手の旅行社に聞いても、国立公園の魅力というのが、最近低下している。世界遺産というのを名前にしてツアーを組んだらお客さんは来ますが、国立公園の名前では、なかなかお客さんは来ないというようなことを言われるわけです。「国立」より「世界」が強いというのは、残念ながら実状なんです。

◆協働という考え方：地域の意向、動向、事情を踏まえて課題に対応するために

では、どうやって国立公園を盛り上げていったら良いのか、さっき申し上げたように、単純に来る人の数を増やすということではなくて、来た人にできるだけ長く、できるだけ深く、この地域を楽しんでいただけるような取り組みをしていくべきと考えております。そういう意味で、一つの考え方として、「協働」というのがあると思っています。保護ということだけでしたら、科学的なデータやいろいろな知見に基づいて、こういう規制をかければ良いというような話ができるわけです。しかし利用していただくということになると、そういうお客さんが何を考えていて、何をしたいのか、またそのためにはいったいどういうサービスをこちらが提供しなければいけないのか、そういうことをよく考えていかなければなりません。たとえば、施設の整備ということでも、遊歩道や園地やビジターセンターというようなものでしたら、環境省も整備しますが、実際のホテルや旅館等は民間事業者の方によって担われているわけですし、実際、ツアーとかエコツーリズムのようなもの、民間の方に担われているわけです。また地元の自治体の方々、あるいは地域の観光協会の方というのは、

国立公園のことだけではなく、広い視野での地域の振興計画や、いろいろなこと取組みをなされていらっしゃる。やはりそういう方と手を携えて、国立公園をどう盛り上げていくか考えていかなければならない。そうすると環境省だけで物事を考えていても、うまくいかないわけで、協働という形を考えていくことが必要と考えています。誤解のないように申し上げますが、国立公園ですので、もちろん国は責任をもって主体的に動きます。環境省として楽をしたいと思うわけではありません。しかし、保護ではなく利用ということについて、深く突っ込んだ取組みをしていくということになると、保護の方もそうですが、利用の方は、なおさら地域の方と手を携えていくことが必要ではないか、またそうしないと、良い利用というのはできないということ、今、私どもとしては思っております。

まず第一に周辺の状況、お客さまの変化、社会情勢、そういうものを、私ども、また地域の方々で共通の認識を持ちまして、また国立公園の特質とか特性とかそういうものも地域の方々にもう一度認識をしていただき、また私どもも国立公園のことだけではなく、もっと広い視野で地域全体の振興計画や取組みのことについて目配りをさせていただきながら、話し合いをして一緒になってこの地域にはどんな課題があるのか、それをどうやって解決に向けて取り組んでいくべきなのか、そのためには国は何をやるべきなのか、あるいは自治体の方々は何をやっていただきたいのか、そして民間の方々は何を担っていただけるのか、そういう役割分担や協力ということと一緒に話し合いながら、取り組んでいくことが必要ではないかと考えています。平成19年の頃から、そのような考え方、国立公園課のなかで検討を進めておりまして、今も進めておるところです。正直申し上げて、予算もなかなかこれから増える見通しはございません。そういうなかで限られた予算、限られた力のなかで、それをうまく使っていくためには、やはり地域の方々と手を携えていきたいと思っております。

◆より良い未来に向けて1：ビジョンやイメージの共有が第一歩～国立公園としての成熟

そういうときに一番重要になるのが、将来のイメージといいますか、ビジョンといいますか、そういうものをやはり協働で持つことだと思っております。この足摺宇和海ということであれば、国立公園であるということについて、自治体にとってのメリットはなんでしょう、あなたの会社にとってのメリットはなんでしょう、あるいはあなたにとってのメリットはなんでしょう、そういうことをやはり最初の段階から考えていただきたいと思うのです。また、この足摺宇和海をどういう国立公園としていきたいのか。国立公園は都市公園とは違って、指定されたときがスタートです。都市公園というのは、公園ができあがったときには、もうできあがっているのであって、それで完成です。その後、多少緑化木がか大きくなるかもしれませんが、基本的には同じです。でも国立公園というのは、公園の指定のもとになった中核となる美しい風景というのは、変わらないのです。昔も今も将来も変わらないでしょう。足摺岬の美しい姿はずっと同じだと思います。でも、国立公園はそれだけじゃない、それをどうやって見ていただくのか、そのためには施設整備だけでなく、どういう見せ方、どういう楽しみ方を提供できるのか、そういうことを含めて、公園というものはだんだん育っていくもの、成熟していくものだというように思っております。ある意味ではどういう規制をかけていくことが必要なのか、あるいはここのサンゴの話もそうですが、自然再生の取組みも必要になってくると思います。またある意味では、どのような利用のあり方が一番いいのか、そういうことも考えていく必要もあるかと思えます。そういうなかで、だんだんと地域に、施設だけでなく、皆さんの頭の中にノウハウが蓄積される。あるいは会社なり事業体の中に、いろいろなやり方やシステムが生まれていく。そうやってソフトとハードと両方で、来ていただいた方に本当に楽しんで満足して帰っていただけるような形になっていくことが国立公園としての成長、国立公園としての成熟というものではないかと思っております。そのためには、足摺宇和海国立公園が、個人個人にとってどんなメリットがあるのか、どんなアドバンテージがあるのか、私はどうしたいのかということを考えていただくことや、あるいはここにどこからお客さんに来てほしいのか、男性に来てほしいのか、女性に来てほしいのか、若い人なのか、年配の方なのか、あるいは外国人にも来てほしいのか、大阪や岡山みたいのところから来てほしいのか、東京から来てほしいのか、いろいろなことがあると思うのです。

あるいは来ていただいた方に何をしてほしいのか、何をさせていただくのが一番いいのか、本当に雲をつかむような話かもしれませんが、将来のビジョンやイメージをみんなで持って、それを踏まえて、話し合いをしてより良い方向に進めていくような取組みができないのかというのが、今の、半分くらい私の個人的な考えですが、国立公園課としての取組みです。なかなか一朝一夕に変わるということではないですが、やはりこういう状況下で国立公園を育てていくためには、そのような考え方と取組みが必要ではないかと思っております。

40年前に足摺宇和海が国立公園に指定されたときと今と比べて、どうでしょうか。昔と今で、今の方が確実に皆さんに楽しんでいただけるようになった、今の方が確実にもっといいように見ていただけるようになった、そのように今、子どもは言うことができるだろうか。あるいは今からまた40年後に、昔に比べればずっといい具合に皆さんに楽しんでいただけるようになった、いい国立公園になった、そういうことが将来言うことができるだろうか。そのような気持ちで、我々としては皆様方と一緒に考えて、一緒になって取り組んでいきたいと考えております。それが国立公園における協働というような取組みだと思っております。すぐにとというのは、なかなか難しいですが。

◆より良い未来に向けて2：世界に向けた発信

最後に、アジア国立公園会議について、お話をしたいと思います。先ほど申し上げました通り、世界で初めての国立公園は、アメリカで始まりました。イエローストーン・モデルという、国有地で全部やるやり方です。タイのようにうまくいかないケースもあったと申し上げましたが、なにぶんにもアメリカが世界で最初の国立公園をつくった国ですので、国際会議とかでもなかなかアメリカの鼻息は荒いです。どうしてもアメリカあるいは欧米というものが、幅をきかせる部分というのはあるわけです。それに対してアジアというのは、いずれも古い歴史をもった国で、古くから人が住んでおり、人口も世界の他の国に比べると過密です。非常に人が立てこんでいるわけです。そうすると自然保護は、たいてい保護と開発の難しい問題を何とか解決したり、いい妥協点を見出したりして、いろいろな苦勞をしてやってきているわけです。それが決して悪いことじゃない。逆にいうと、そういうのを政府が力で押し切るようなことがあってはならないし、だからといって、民間企業がでたらめな開発をするというのも許されるわけじゃない。そういうアジアの経験というのは、結構良いんじゃないかというように、だんだん国際的にも評価されてきている。また自然に対する見方というのも、アジア人は、欧米人とはちょっと違う見方がある。自然に精神的な価値、あるいは宗教的な価値を見出すところ。日本でもご存じの通り、高野山や比叡山をはじめとして山に宗教的、精神的な価値を見出すとか、あるいは特定の樹木や石や岩にそういうものを見出すことはよくあります。最近パワースポットという言い方をしますが、これは東アジア、東南アジア、南アジア、いずれもそういうのがあります。実際、タイやネパールでもそういうところを見ております。そういうようなところというのは、実はそれを契機として、やっぱりこの山は守らなければいけない、この湖は守らなければいけないという、自然保護の大きなきっかけになるんですね。それも一つのアジアの特質だろうと。またもう一つはアジアの皆さんが日本に今ちょっと関心をもっているのは、もう8年くらい前になりますか、インド洋大津波というのがありまして、スリランカやインドネシアやタイも大変な被害を受けました。被害から回復する際に、正直申し上げて、復興が先だということで、かなり国立公園等もないがしろにして、ちょっと乱暴なやり方をとって、かなり後悔している部分というのがあります。そういう意味で、今の日本が東日本大震災からどうやって、また三陸の新しい国立公園がどうやってうまく復興と国立公園というものを両立させていくか、その辺にも関心が集まっているんですね。だからそういうアジアでのアジア独自の考え方とか、アジア独自の取組み、あるいはアジアでいろいろ苦勞したり、失敗したりして培ってきた、人口が多くて保護と開発の両方をせめぎ合う中でどうやって一番いい妥協点を見出していくかという苦勞、そういうようなものをもう少し世界に対して訴えていく。その中でアジア地域全体としての融合、パートナーシップを深めていくことをしたいと思っております。これは、日本の国立公園をアジア地域に対して売り込みをするという意味合いもあります。そういう意味で少々話が飛んでいますが、

国立公園、いずれの国にもある仕組みですが、それぞれの国には、それぞれの国立公園というものがある。アジアにはアジアの一つのまとまりがあり、そういうところに着目して、日本でリーダーシップをもって、アジアで最初の国立公園についての会議を今やろうとしております。そして日本の国立公園を打ち出したいと思っております。今年の11月に、三陸復興の意味合いもありまして仙台で開催いたしますが、これから参加の募集を呼びかけたいと思っております。是非、この足摺宇和海で活動されていらっしゃる方々からも、その会議で発表いただくような方、あるいは組織が出ていただければ嬉しいなと思っております。国際会議なので英語ですが、同時通訳も入りますので、それほどハードルが高いというわけでもありません。ですので、日本の国立公園を海外に打ち出していくというようなところにも、興味を向けていただけたらなと思っております。

以上、国立公園のことにについて雑駁なお話でしたが、いささかの説明で、私の個人的な経験、意見などいろいろ述べさせていただきました。改めて、この足摺宇和海国立公園のこれからも、地域の方々の熱意あふれる取り組みによって発展していきますことを、そしてまた40年後も、本当に良い国立公園として成熟した、育ってきたといえるようになることを心から祈念申し上げまして、そしてまた日頃の皆様方の、私ども国立公園、そして環境省に対するご理解、ご支援、ご協力に深く感謝を申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【会場からの質問】

今、国立公園の保護だけでなく、利用の方のお話をずいぶんいただいたのですが、地元にいると、何が見たくて皆さんここに来るのかというニーズの話がよく分からないんですね。自分では見ていただきたいものというのはたくさんありますが、来る方が何を求めて来るのかというのがよく分からない。たぶんそのところがうまくマッチングしなくて、お客さんが減っているじゃないかなと、僕は思っているのですが、そういうのをうまく協議できるような、そういう場というのは、何かあるのでしょうか。あるいは要するに予算がなくてという話がよくありますが、協議会つくっても、なかなか来ていただく側の方のお話って聞けないんですね。そういうのがうまくいっている例とかいうのは、どこかにあるのでしょうか？

桂川氏：

なかなか難しいご質問ですね。今週も都内で自然公園研究会というのがありまして、そこで交通公社の方が発表されたのを思い出しましたが、国立公園に行ってどういう活動をされましたかというアンケートをされたそうです。1番多いのが景色を見た、2番目が温泉に入りました、それから、食事をしました、お土産を買いました、この4つが圧倒的に多くて、あとは大変少なかったわけですね。非常にがっかりしまして、先ほど言いましたのと全然違う、やっぱりまだ通過型のお話がメインだなというので、大変がっかりしたんですが、そういうユーザーの方のご意見をどう聞くのかというのは、なかなか難しいところですね。正直言いまして、私も、このところだったら良い話があるというのを軽々にはご紹介できるようなところというのは、あんまりございません。個人的には、昨年夏に行きました鳥羽市なんかはなかなかうまくいってらっしゃると感心してはいたんですが、ビジターとして鳥羽市に行ったことがないのでちょっとそこはよく分からない。ただ、地域の方の間で、協働というようなことで、何らかのお話合いを始めたということであれば、それは我々の方からも何とかサポートできる道はあるんじゃないかと思っております。また、こういうようなことがあるんだけれども、ということがありましたら、自然保護官を通じてあげていただければ、私ども本省の方で引っ張り出せるデータの中でいいようなものがあれば、ご紹介というような形もできるんじゃないかと思っております。残念ながら、私の頭の中にあんまり入っていないんですが、戻れば、いわゆる優良事例ということでご紹介できるようなところもあるのではないかと考えております。